

武田勝頼の最期に関する一考察

富永実結里

2026年5月

本稿は、2025年12月13日に開催されたバーチャル学会2025での研究発表「武田勝頼の最期に関する一考察」、及び2026年3月28日に開催された研究部春合宿2026成果発表会での報告「武田勝頼の最期に関する一考察」の内容に加筆修正を加えたものである。発表に際して、参加者の皆様方から非常に重要な示唆をいただきました。心より感謝申し上げます。

概要

武田勝頼(1546-1582)は、武田氏第17代当首で、甲斐国(現在の山梨県)の戦国武将である。勝頼は甲州征伐で戦死したと考えられているが、その詳細については、未だ明らかではない。

そこで本論文では勝頼の死について書かれた史料の記述を読み比べ、信憑性の高い最期を考察する。討死と書いてあるものが『改正三河後風土記』『武田三代軍記』『甲陽軍鑑』、自害と書いてあるものが『甲乱記』『理慶尼記』『三河物語』であり、『改正三河後風土記』以外は情報の出所の明記なく、勝頼の最期が華々しく描き過ぎな程描かれている。

しかし、改正三河後風土記は情報の出所を明記した上で「勝頼は大した抵抗ができずに討ち取られた」とあるため、信憑性が高いのではないかと考えられる。

初めに

武田四郎勝頼とは武田氏17代目の当主であり、武田信玄の息子である。勝頼は四男として生まれたが、長男は信玄と対立し、信玄の暗殺を企てたため廃嫡された。次男は盲目であり、三男は早世したため勝頼が家督を継ぐこととなった。しかし、武田家は長男が継ぐ予定であったため勝頼は諏訪家の当主となっていた。信玄にとって勝頼は信勝(勝頼の嫡子)が当首になるまでの中継ぎと考えていたが、それによって勝頼が正当な当主でないと信玄以来の重臣層に見なされてしまい、軋轢を生んでしまった。勝頼は長篠の戦いで織田信長と戦った。そして信長に追い詰められ、甲州征伐の最後の戦いである天目山の戦いで勝頼は戦死した。



甲州征伐とは、天正10年(1582年)2月3日から3月11日に起きた、織田信長、徳川家康、北条氏政が勝頼率いる武田氏一族を攻め滅ぼした一連の合戦である。武田氏が朝敵となってからの合戦であったため、武田方の多くが離反あるいは降伏し、武田氏の防衛体制は急速に崩壊した。同年3月11日、天目山のふもとで織田方の軍勢に包囲され、正室や嫡男らと共に自害し、甲斐武田氏は滅亡した。

天目山の甲斐大和駅にある武田勝頼像。(著者撮影)
ここから3キロ程行くと武田氏滅亡の地がある。

しかし、勝頼の最期が具体的にどのようなものであったのかについては、現状明らかではない。武田氏について体系的に論じた平山(2017)の『武田氏滅亡』という勝頼の成果と蹉跌を検証したものでも、その最期は明らかになっていない。

勝頼の最期について記述された様々な史料の多くは、誇張されて華々しく描かれている。また諸史料間で勝頼の最期に関する記述が一致しないことも多く、実際に勝頼がどのような形で戦死したのかを把握することは困難である。勝頼の最期がわかれば平山(2017)の立論の重要な部分を補完できる。そこで本論文では勝頼の最期について記述された史料を比較検討することで、史実に沿った実像を明らかにしたい。

2 検討する史料について

勝頼の死について書かれた史料の記述を読み比べる。『三河物語』『理慶尼記』『甲乱記』『武田三代軍記』『甲陽軍鑑』『改正三河後風土記』を使用する。それぞれの史料の詳細は、以下の表にまとめた。

史料名	勝頼の最期	参照した版
三河物語	自害	本論文では、平山優氏が2017年に出版した『武田氏滅亡』という研究書を使用した。
理慶尼記	自害	同じく平山氏の『武田氏滅亡』を使用した。
甲乱記	自害	国書データベースの1646年に成立したものと平山氏の『武田氏滅亡』を使用した。請求記号020-0146-001-0648
武田三代軍記	討死	清水茂夫氏と服部治則氏が1987年に出版した『武田史料集』という印刷本を使用した。
甲陽軍鑑	討死	佐藤正英氏が2006年に出版した『甲陽軍鑑』という印刷本を使用した。
改正三河後風土記	討死	桑田忠親監修、宇多川武久校注の1976年に出版された『改正三河後風土記中』という印刷本を使用した。

3 勝頼の最期に関する記述

史料を検討した結果、自害と書いてあるものが『三河物語』『理慶尼記』『甲乱記』である。討死と書いてあるものが『武田三代軍記』『甲陽軍鑑』『改正三河後風土記』である。それぞれの史料がどのようなものか、そして勝頼の最期に関する記述を1つずつ要約して紹介する。まずは、自害と書いてある3つの史料の記述である。

3-1『三河物語』: 腹十文字の切腹

まずは『三河物語』である。家康・秀忠・家光に仕えた大久保忠教が著者であり、1622年に成立した。そこでは、土屋昌恒は奮戦ののちにとって返し、勝頼夫人と側の次女たちに別れを告げた後、勝頼・信勝父子の介錯を行い、自らも腹十文字に掻き切って殉死したとある(平山,2017,p.677.)。土屋正恒は勝頼の忠臣として知られる人物である。腹十文字は、腹を横一文字に掻き切った後、返す刀で十文字に切る切腹方法であるが、現実的にそう簡単にできることではなく、また創作でよく出てくる表現である。したがって自害方法として腹十文字が出てくると信憑性が低いと考えられる。

加えてこの史料の著者は勝頼と同時代に生き、証言者としての資格はある。しかし、徳川家と大久保家の歴史と功績を記したり、幕府成立からの自身の経験や思想を記したりと「家訓書」として書かれたため、勝頼の記述に対する信憑性は低い。

3-2『理慶尼記』: 美しい辞世の句

次に『理慶尼記』である。これは出家して大善寺に住んでいた理慶尼が書いた「御伽草子」である。この理慶尼という人物は勝頼の乳母であり、天目山の戦いで滅亡する8日前、勝頼一行を一晩大善寺に泊めた人物である。



図1 この絵は『理慶尼記』内にある絵である。勝頼の首が信長の元に渡った場面だと思われる。『理慶尼記』はこのような絵が頻発することから、物語として書かれた事が伺える。

『理慶尼記』国文学研究資料館所蔵 (三十裏-三十表)

内容は以下の通りである(平山,2017,p.677-678.)。勝頼は夫人の遺骸を抱いたまま、しばらく言葉がなかった。そこへ敵が迫ってきたため、激しく戦い、それを見た後続は気後れし、進んでこなかった。これを見た勝頼は潮時だと思い、切腹することにした。土屋は謹んで介錯を引き受け、準備をする。勝頼は正座し、辞世の句を詠んだ。

朧なる 月のほのかに 雲かすみ 晴れていくえの 西の山の端

信玄の次代、武田家の統領などというしがらみを雲に、それに囚われた自分を朧月に例えた。しかし、自害することでしがらみから解放され、極楽へと旅立てる、と解釈できる。これを受けて、土屋が返歌を詠んだ。

俳(おもかげ)の みおしはなれぬ 月なれば 出るも入るも 同じ山の端

勝頼は潔く自害した。面影は信玄であり、それが離れない月(勝頼)なのだから、入る時はもちろん、出る時も西方浄土から来ている、即ち最初から輝いていたという意味になるのではないかと考える。

人物の信憑性は高いが、この『理慶尼記』は物語として書かれたものであり、内容も物語色が強い。信憑性は低いと考える。

3-3『甲乱記』: 美しすぎる最期

『甲乱記』である。成立過程についての詳細はまだ明らかにはなっていないが、江戸時代初期頃に成立したと見られる軍記物である(清水・服部, 1987, p. 112)。軍記物はある特定の陣営の正当性を示す目的で「物語」として書かれたものであるため、この史料の信憑性は高くない。実際、物語色が強い。しかし、甲州征伐について研究をする上では必ず出てくる史料である。武田氏滅亡の全容について書いている。

内容を要約すると以下の通りである(『甲乱記』42丁裏-43丁表。国文学研究資料館蔵本(請求番号 020-0146-001-0648); 平山, 2017, pp. 676-677.)。勝頼が敵4、5人と斬り合っていたところ、秋山紀伊守が勝頼夫人が自害した事を告げる。勝頼は急ぎ夫人の元へ駆けつけたが、伏している夫人の雪のような肌は血に染まり、化粧も色褪せた様は朝顔の花が露に萎れたようだった。流石の勝頼も心乱れるが、落ちる涙を抑え、夫人の髪を我が膝の上にかき上げて生きている人にもものを言うように「この戦は不慮に起こったが、ついに立て直すことができずに涙に沈ませてしまった事が悲しい。不運な者に嫁いだために、悪縁にひかれたのも前世の因果なら力及ばない。しばらく待ってほしい。三途の川は我が手をとってお渡しいたそう」と言った。そして、夫人の腹に突き刺さっていた脇差を抜き、己の腹を十文字に掻き破り、腑を掴んで四方に投げ捨て、夫人と同じ枕に伏して倒れた。

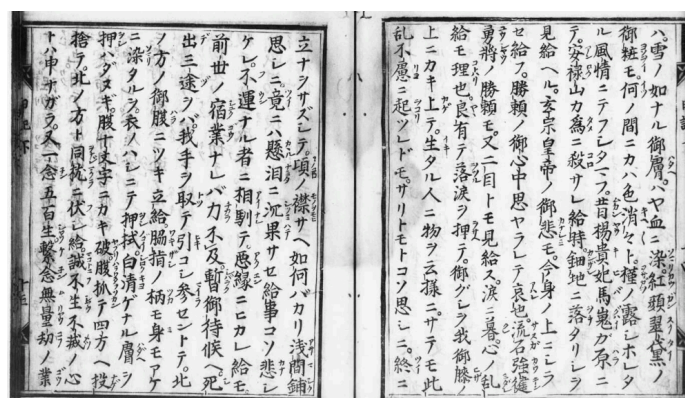


図2 この頁は、今紹介した部分の一部にあたる『甲乱記』の原文である。「雪ノ如ナル」から最期の記述が始まり、左の頁の左から2行目、「同ジ枕ニ伏シ給」で終了している。

『甲乱記』国文学研究資料館所蔵(四三裏-四三表)。

甲州征伐については多くの史料に記述があるが、『理慶尼記』と『甲乱記』は特に創作されていると思われる。なぜなら、華々しすぎる最期であり、あまりにも記述が詳しいからである。現実的に考えて、天目山の戦いでの武田勢は全滅しているため、勝頼の最期を知っているのは織田勢である。敵であるため、近くでは聞き取れないと思われる。そのため、ここまで詳しく聞き取ることは困難であり、信憑性の高い記述とは考えづらいだろう。

ここからは、討死と書いてある3つの史料の記述を紹介する。

3-4『武田三代軍記』: 創作

まずは『武田三代軍記』である。前述の通り軍記物は「物語」として書かれたものである。江戸時代中期に成立し、武田信虎、信玄、勝頼の戦国武田三代について書かれている(清水・服部, 1987, p. 172.)。

内容は以下の通りである(清水・服部, 1987, pp. 302-304.)。勝頼は敵に切り込み、土屋惣蔵、百矢を無駄にせず敵を射落した。主従40余人、敵兵を100余り討ち取り、二度敵を追い崩した。その時、敵兵2000人余りが押し寄せてきた。勝頼は、11人まで切り伏せ、土屋含む家臣も勝頼に近づく敵を、切伏せる。そうすれば敵兵の足並みが乱れ、また二度追い崩した。今度は、1000人が押し寄せる。奮闘したが、味方は20余人討たれた。しかし、勝頼親子はまだ傷を負ってはならず、なおも勇敢に戦った。勝頼たちは計310余人を切捨て、400余人に

傷を負わせた。だが、敵兵10人が一斉に土屋昌恒に槍を付ける。勝頼はそんな土屋を不憫に思い、敵を6人まで切り伏せるが、槍を付けられた。この時、敵兵は数を尽くして討たれ、味方もことごとく討死し、勝頼父子の首も獲られた。

4度敵を追い返して無傷なことがあるだろうか。加えて、40人ほどで敵兵を310人も切り捨てることができるだろうか。この記述は創作である可能性が高い。

3-5『甲陽軍鑑』: 相対的に詳しい記述

次に『甲陽軍鑑』の記述を見ていこう。武田家の家臣である高坂昌信などが書いたものである。江戸時代中期に成立し、武田信玄、勝頼を中心とした歴史「物語」である(佐藤,2006,pp.391-392.)。

佐藤氏の『甲陽軍鑑』曰く、土屋に敵の槍が6本同時に刺されてしまった。それを見た勝頼は走り寄って、左の手で槍をはねのけ、6人の敵を全て切り伏せた。ところが、そこへさらに3本の槍が突きかかり、勝頼の喉に一本、脇の下に2本を突き刺した。たまたま勝頼が倒れ込むと、敵は勝頼を押し伏せて首を取った(平山,2017,p.678.)。

他の史料と比べるとまだ創作が激しくはないと感じるが、それでも記述が詳しすぎるように思われるため、この記述の信憑性は高くないと思われる。

これまで提示した5つの史料は全て歴史的事実をあまり反映したものではない、信憑性が低いと述べた。歴史的事実を反映したであろう資料を提示すべきであろうが、勝頼の最期について書かれた文書において、信憑性の高い史料は現在確認できていない。しかし、勝頼の最期について書いた史料で信憑性が高いと感じるものは概ね存在しない。当時、相当情報が混乱したのは想像に容易い。実際、一級史料として名高い『信長公記』には勝頼主従の死についてはっきりと書かれていない。そのため、むしろ後世の方が情報が整理されているのではないかと考えられる。

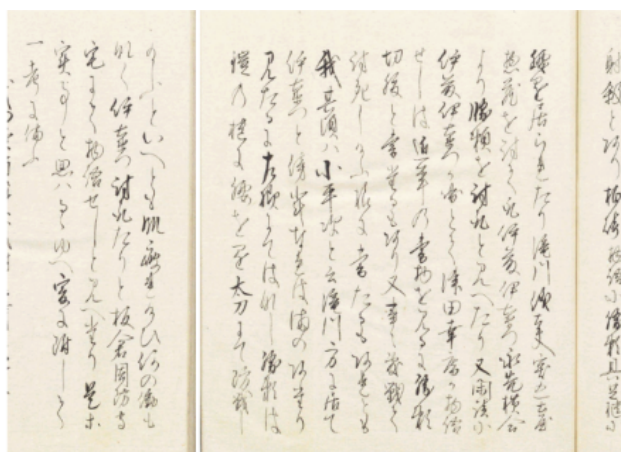
3-6『改正三河後風土記』: 幕府の儒官が思う歴史的事実

最後に紹介する『改正三河後風土記』は、江戸時代後期に成立した。幕府の儒官(儒学者)である成島司直(もとなお)が幕命により『三河後風土記』などの史料を編纂したものである。徳川最良な面はあれど、勝頼の最期は徳川が関わっていない。

内容は以下の通りである(桑田・宇田川,1976,p163.現代語訳は筆者.)。

『柏崎物語』によれば、勝頼は具足櫃に腰かけていた。滝川儀太夫はこれを狙い、土屋惣蔵を討って取り、伊藤永光が横合いより勝頼を討ち取った、と見える。また雑談で、伊藤伊右衛門が語った話として、津田幸庵が語ったのは、近年の書物を見ると勝頼切腹と書いているものもあり、また勇敢に戦って討ち死にしたと書いているものもあるが、我はその頃小平次といい、滝川方に居て伊右衛門と同僚だったのでその現場を目の当たりにした。勝頼は鎧の櫃に腰をかけ、太刀にて防戦してはいたものの、飢えと疲れでたいした働きもできず、伊右衛門が討ち取った。と板倉周防守宅にて語ったと見える。これら真実と思えるゆえ、ここに加えて一考に値する¹

『改正三河後風土記』には勝頼の最期に関する記述が2つある。一つ目は『三河後風土記』を元にした記述であり、この記述は詳細すぎるため、あまり信憑性が高くないように思われる。2つ目の上記の記述は情報の出所が明記されており、辞世の句や勝頼等の細かい台詞など聞き取り、記述するのが難しいような記述がないため、信憑性が高いのではないかと考えられる。加えて、成島司直は幕府の儒官であるため、能力が高かった人物と考えられ、そのような人物が『改正三河後風土記』を編纂する上で数多くの史料を読んだ中、この記述が真実と思えたのである。その意見は蔑ろにできないと考える。



に附こみ土屋惣蔵を討取て、伊藤伊右衛門永光横合とて津田幸庵が物語せしは、近年の書物を見るに、たるもあれども、我その頃は小平次といひ、滝川方にてはなし。勝頼は鎧の櫃に腰をかけ、太刀にて防討取たりと、板倉周防守宅にて物語せしと見えたり。

図3 この頁は、今紹介した部分にあたる『改正三河後風土記』の原文である。右から読んでいって欲しい。中途半端だが、一番右の中央あたりから「柏崎物語に」と最期の記述が始まり、「一考に備ふ」で終了している。「幕命」によって成立したものであるため、信憑性が高いのではないと思われる。

『改正三河後風土記』愛知県図書館所蔵(五二裏-五三裏).

4 考察

『三河物語』『理慶尼記』『甲乱記』『武田三代軍記』『甲陽軍鑑』等は情報の出所の明記なく、勝頼の最期が華々しく描き過ぎな程描かれている。しかし、『改正三河後風土記』は情報の出所が明記されており、華々しい最期の記述ではない。加えて、勝頼の最期について過度に詳細な記述がみられないため歴史的事実を相対的に反映していると思われる。そのため、他の古文書と比べて信憑性が高いのではないかと考えられる。もちろん『改正三河後風土記』の信憑性が圧倒的に高いとも断言はできないが、勝頼の最期についての記述がある史料の中では比較的歴史的事実を反映していると思われるということである。

武田勝頼の最期についての記述がある史料は信憑性が低いものが多い理由を考えてみる。まず一つは、天下に名を轟かせた武田氏が、最後は朝敵に堕ち、家臣僅か40人と共に滅亡するというのが、人々の創作欲を煽ったからという点が考えられる。似たようなケースとしては源義経が挙げられる。平家滅亡の立役者となり、国に名を轟かした英雄だが、最期は追い詰められ、僅かな家臣たちと共に滅びた。義経も北行伝説(北へ逃げて生き延び、チンギスハンになったという伝説)があり、最期がはっきりしていない。義経は平家物語を筆頭に物語が多く作られ、亡くなったとされる場所や墓標は複数ある。他にも、情報が混乱した原因の一つとして、彼らが滅んだ場所が見通しの良い平地ではなかったことが考えられる。彼らは進退極まり、最後の戦いを迎えたため、日川(三日血川)と崖に挟まれた非常に狭い場所で最期を迎えた。



著者撮影

この鳥居畑古戦場跡が彼らが滅亡した場所である。狭く、見通しが悪い場所であることがわかる。整備されてもこれほどの細さであり、日川はダムの影響で昔よりも水量が減っているため、昔はこれ以上に狭かったと考えられる。よって、武田氏の最期を見ることができた人物は非常に少ないだろう。

5 結言

今回は、『改正三河後風土記』の記述が他の史料と比べて信憑性が高いのではないかと考えた。『改正三河後風土記』は様々な史料を編纂したものであるため、本文内で触れている史料も多い。その中で、『改正三河後

風土記』の40年前に作成された『柏崎物語』が『改正三河後風土記』内で似たような記述があるものとして紹介されているため、今後は『柏崎物語』を研究したい。

参考文献

平山優(2017)『武田史滅亡』角川選書.

清水茂夫・服部治則(1987)『武田史料集』新人物往来社.

佐藤正英(2006)『甲陽軍鑑』ちくま学芸文庫.

(編)桑田忠親・宇田川武久(1976)『改正三河後風土記 中』秋田書店.

図1 『理慶尼記』(国文学研究資料館所蔵) 出典: 国書データベース,

<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100276224/30?ln=ja>

図2 『甲乱記』(国文学研究資料館所蔵) 出典: 国書データベース,

<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100045063/4?ln=ja>

図3 『改正三河後風土記』(愛知県図書館所蔵) 出典: 愛知県図書館デジタルアーカイブ,

https://wwwb7.musetheque.jp/aichi_pref_library_archives/rest/media?cls=media11&pkey=000353